

分裂節の内部構造再考

著者名(日)	本多 正敏
雑誌名	Scientific approaches to language
巻	11
ページ	47-69
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000690/

分裂節の内部構造再考*

本多 正敏

神田外語大学

本稿の目的は、英語の分裂文 (it be XP that...) の分裂節 (that 節) を、焦点要素の再構成 (reconstruction)、定性効果 (definiteness effect)、that の生起、主文現象の生起の観点から再考し、その構造を明らかにすることである。データの再考から、分裂文は、FP の指定部・補部という構造関係で識別焦点 (identificational focus) と存在の前提 (existential presupposition) を示し、焦点要素が FP 指定部へ直接移動すると主張する。また、分裂節内部では、話題化のような主文現象が適用されないことを示し、Rizzi (1997, 2004) の分離 CP 仮説に基づき、この特徴を焦点移動の性質から導き出す可能性を探る。結論として、A-bar 移動を伴う節構造を捉える上で、分離 CP 仮説が有用であると述べる。

1. はじめに

英語の分裂文 (it be **XP** that...) は、文中のある要素を際立たせ、強調するために用いられる。以下の例を見てみよう。

- (1) a. It was **John** that we met yesterday (but not Bill).
b. It was **to Mary** that we sent a letter (but not to Susan).

(1a, b)において、コピュラ (be) と補文標識 (that) の間に生起している NP・PP は話し手が聞き手に注目させたい要素を示す。この特定の位置で、要素を強調することができるため、

* 本稿は、日本英語学会第 27 回大会 (2009 年 11 月 14 日、於：大阪大学) での口頭発表「英語における分裂文の焦点移動分析—統語構造地図の観点から—」、及び本多 (2010) の一部を加筆・修正したものである。口頭発表の際は、聴衆の方々から貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。尚、本稿における誤りや不備は全て筆者の責任である。

分裂文は強調の意味を統語的位置で示すことができる構文と考えられている。以下では、コピュラと補文標識の間に現れる強調的要素を焦点 (focus) と呼び、後続する節を分裂節 (cleft clause) と呼ぶ。^{1,2}

生成文法に基づく分裂文の先行研究において、分裂節それ自体を取り上げて考察した研究は少ないが、Heggie (1988)では、固有名詞・裸否定数量詞 (bare negative quantifier) が分裂文の焦点や非制限的關係節の先行詞として生起できないという共通点を示す一方、Reeve (2011)は分裂節に生起する *wh* 演算子の種類や島の効果が制限的關係節と類似している点を指摘している。本稿では、分裂節の構造を、再構成 (reconstruction)、定性効果 (definiteness effect)、*that* の生起、主文現象の生起の観点から再考し、以下の二点を主張する。

- (2) [1] DP を先行詞とする制限的關係節は主要部 D が CP を補部選択する外在的 D (external D) 構造 ([_{DP} [_{CP}]]) を持つのに対し、分裂文は DP を焦点要素として分裂節内部から直接移動する構造と派生を持つ。
- [2] 分裂節は、文中に生起する FP の指定部・補部の構造関係で、識別焦点 (identificational focus) と存在の前提 (existential presupposition) を示す。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では、分裂文における再構成、定性効果、*that* の生起、主文現象の生起に関するデータを見る。第 3 節では、近年の先行研究の内、É. Kiss (1998)、Reeve (2011)、Belletti (2008) を概観する。第 4 節では、分裂文の焦点と前提の意味に着目した分析を提案し、第 5 節では分析に基づく予測の検証を行う。第 6 節は結論である。

¹ 本稿では、コピュラと分裂節の間の要素 (XP) が焦点解釈を持つ分裂文のみを考察の対象とする。分裂文が持つその他の談話的役割については Prince (1978) を参照されたい。

² 本稿で提示する例文に関して、焦点解釈を持つ要素を一貫してボールドで示す。

2. 分裂節の特徴

2. 1. A-bar 移動と再構成 (reconstruction)

ここでは、分裂節の基本的な特徴の内、島の制約 (island constraint)、裸数量詞 (bare quantifier) の焦点での生起と再構成 (reconstruction) に関するデータを見る。³

まずは、分裂文における島の制約に関する以下のデータを見てみよう。

- (3) a. *[?] It was **John**_i that Mary talked to the man [who met **t_i**].
b. * It was **in this way**_i that Mary talked to the man [who solved the problem **t_i**].

(3a, b)において、DP (John)・様態の PP (in the way) が関係節内部から移動しているが、いずれも非文法的である。Chomsky (1977)や Ross (1986)は、分裂文は島の違反 (複合名詞句制約違反) を示すため、その派生に A-bar 移動が関与しているとしている。また、焦点以外の要素を移動する場合、分裂節それ自体も、強い島 (strong island) として振舞う。⁴ 以下の例を見てみよう。

- (4) a. [?]* Which drink_i was it **Boris** [that bought **t_i**]?
(Reeve (2011: 153))
b. * How_i was it **Boris** [that bought the drink **t_i**]?
(ibid.)

³ ここで考察しない分裂文の特徴は多々あるが、分裂文に生起する“it”はどのような性質を持つ要素か (Reeve (2011))、焦点位置に生起できる要素はどのようなものか (Stowell (1981); Radford (1981); Heggie (1988))、不定詞が分裂節として生起できないのはなぜか (Declerck (1988))、補文標識を伴う分裂節と *wh* 演算子を伴う分裂節はどう異なるか (Den Dikken (2009)) 等の問題は、紙面の都合上、本稿では扱わない。

⁴ 一般的に、島は、移動要素に関わらず移動を阻む関係節のような強い島 (strong island) と移動要素によっては移動を許す否定の島 (negative island) のような弱い島 (weak island) に分けられる。島に関わる現象と分析の詳細に関しては、Szabolcsi (2006)を参照されたい。また、ここでのデータは制限的關係節・分裂節が、演算子や焦点以外の要素を移動する際に、強い島として働くことを示すデータであることに注意されたい。

(4a, b)において、分裂節内部から、焦点以外の要素として、DP (which drink) と様態の付加詞 (how) が移動しているが、いずれも非文法的である。(3a, b)と(4a, b)のデータをまとめると、分裂文の派生には A-bar 移動が関与し、分裂節それ自体も島として振舞うと言える。

次に、焦点位置での裸数量詞の生起に関する以下のデータを見てみよう。⁵

- (5) a. **Nothing_i** he drank **t_i**. (Reeve (2011: 149))
 b. * It was **nothing_i** that he drank **t_i**. (ibid.)
 (6) a. **Everything_i** John drank **t_i**. (Reeve (2011:150))
 b. * It was **everything_i** that John drank **t_i**. (ibid.)

(5a, b)の対比は、裸否定数量詞 (bare negative quantifier) は、左方移動による焦点化を受けるが、分裂文の焦点位置には生起できないことを示す。同様に、(6a, b)の対比は、裸普遍数量詞 (bare universal quantifier) が左方移動による焦点化を受けるのに対し、分裂文の焦点要素にならないことを示す。従って、左方移動による焦点化と分裂文の焦点化を単純に同一視することはできないと言える。

最後に、再構成に関するデータを見る (cf. Higgins (1973))。⁶

- (7) a. It is **proud of himself_i/*him_i/*John** that he_i seems to be.
 (Reeve (2011: 161))

⁵ (5a)は、話題化のデータではない点に注意されたい。また、裸否定数量詞が左方移動による焦点化を受ける点に関しては、Rizzi (1997)も参照されたい。

⁶ ここでは、束縛原理 A・B・Cに関して、以下の GB 理論の定義を採用する。

(i) Binding Theory

a. An anaphor is bound in its governing category
 b. A pronominal is free in its governing category
 c. An R-expression is free (Chomsky (1981: 188))

(ii) α is the governing category for β if and only if α is the minimal category containing β and a governor of β , where $\alpha = NP$ or S . (ibid.: 188)

本稿では、ミニマリストプログラム以降の枠組みでの束縛に関わる統語現象と束縛原理の定義に関わる問題には立ち入らない。

- b. It is **his_i finals** that no students_i enjoys. (ibid.)
- c. It was a **chicken** that every dog ate. [$\forall > \exists$] (ibid.)
- d. It's **careful track_i** that she's keeping **t_i** of her expenses.
(ibid.: 164)

(7a)は、焦点化された AP 内に、分裂節内部の代名詞 (he) と同一指示を持つ再帰代名詞 (himself) のみが生起可能であり、束縛代名詞 (his)・指示表現 (John) は生起できないことを示す。すなわち、AP 内の再帰代名詞が、あたかも分裂節内部に生起し、束縛原理 A を満たしているかのような振る舞いを示す。同様に、AP に含まれる代名詞は原理 B 違反、指示表現は原理 C 違反を示すように振舞う。このような再構成効果として、(7a)以外にも、(7b)の分裂節内の数量表現 (no students) による束縛変項 (bound variable) 解釈、(7c)の存在数量詞が分裂節内部の普遍数量詞よりも低い作用域を取る解釈 (犬の数に対応して食べられた鳥が存在する解釈)、(7d)のイディオム表現の移動が挙げられる。

以上のデータから、分裂文の派生には A-bar 移動が関与し、分裂文の焦点は左方移動による焦点とは異なる特徴を持ち、焦点要素は再構成効果を示すと言える。

2. 2. 定性効果 (definiteness effect) と that の生起

ここでは、定性効果 (definiteness effect) と補文標識 (that) の生起に基づき、制限的關係節と比較しながら、分裂節の特徴を整理する。

まず、制限的關係節と分裂節における定性効果のデータを見てみよう (Browning (1991))。

- (8) a. The men_i that there were t_i in the castle were all knights.
- b. * It was **the men_i** that there were t_i in the castle.
- (cf. There were [some men/*the men] in the castle.)

一般的に、存在を表す *there* 構文は、定性効果 (definiteness effect) を持ち、コピュラの後を生起する名詞句は不定に限られる (Milsark (1979))。 (8a, b)において、存在の *there* 構文が関係節・分裂節内に生起しているが、DP (*the men*) は、制限的關係節の先行詞として生起できるのに対し、分裂節の焦点としては生起できない。定性効果を踏まえると、制限的關係節の場合、節内の空所に対応する要素は DP (*the men*) ではなく、不定名詞句 (*men*) であるかのように振舞うのに対し、分裂節内部の空所に対応するのは定名詞句 (*the men*) であるかのような振る舞いが見られる。

次に、制限的關係節の先行詞が主語に対応する場合と分裂文において主語が焦点化する場合、補文標識 (*that*) が生起しなければならないという反 *that* 痕跡効果 (anti-*that*-trace effect) が見られる (Reeve (2011))。⁷

- (9) a. I know the man_i that t_i bought the vodka.
(Reeve (2011: 153))
- b. It was **Boris**_i that t_i bought the vodka.
(ibid.)
- c. * **Boris**_i you said that t_i bought the vodka.
(ibid.)

(9c)は、*that* 痕跡効果の例であり、*that* が動詞の補部 CP に生起する場合、補文内の主語を焦点化することはできない。つまり、動詞の補部の場合、補文内の主語を焦点移動する際は、ゼロ形補文標識を義務的に用いなければならないと言える。

⁷ 本稿では、分裂文と制限的關係節における *wh* 演算子の生起に関する問題には立ち入らない。Reeve (2011)は、理由の *wh* 演算子 (*why*) を除き、分裂文と制限的關係節において生起する *wh* 演算子の分布は同一であるとしているが、*that* やゼロ形補文標識以外には、*who* や *which* のみが生起可能であるとする立場 (Delahunty (1982); Rochemont (1986)) もある。後者の立場を取ると、分裂節と制限的關係節は異なる節を形成するということになるが、本稿における論点との関連性については今後の課題としたい。

(9c)とは対照的に、(9a, b)の制限的關係節・分裂節の場合、節内の空所が主語に対応する場合、**that** が生起しなければならない。一見すると、制限的關係節と分裂節は、**that** の生起に関して同じ振る舞いを示すように思われるが、以下の例が示すように、インフォーマルな文体では、主語の焦点化の際、分裂節のゼロ形補文標識を使用できる点が指摘されている (Delahunty (1982); Huddleston and Pullum (2002))。

- (10) a. I know the man_i (that/who/*0) t_i spoke to me.
 b. It was **John**_i (that/who/0) t_i spoke to me.

(10a, b)の対比も含めると、分裂節は、制限的關係節とは異なり、ゼロ形補文標識の使用を認める点で、動詞の補部 CP としての特徴をも併せ持つことを示していると考えられる。

以上をまとめると、分裂節は、制限的關係節とは異なり、定性効果を示し、ゼロ形補文標識の生起を認める点で動詞の補部としての特徴をも併せ持っていると言える。

2. 3. 主文現象の生起

ここでは、分裂文の主節と分裂節における主文現象の生起に関するデータを見る。

まず、分裂文の主節では、様々な主文現象が生起できる点が指摘されている。

- (11) a. John_i, it was that Mary met t_i yesterday.
 b. **John**_i it was that Mary saw t_i. (Reeve (2011: 169))
 c. Who_i it was that Mary met t_i yesterday?
 d. % On no account should it be **the students**_i who t_i are correcting these papers!
 (Haegeman and Meinunger (2011: 15))
 e. How happy_i it was that she was t_i in those days!
 (Declerck (1988: 198))

上記の例では、焦点要素に、左方移動による話題化(11a)、焦点化(11b)、*wh* 移動(11c)、感嘆移動(11e)が適用され、(11d)では、主節に否定倒置が適用されている。これらのデータは、分裂文の主節部分・焦点要素に左方移動を伴う主文現象が適用されることを示している。また、(11d)では、分裂文の焦点要素に、主節への焦点化が適用されているため、これら二つの焦点は異なることを示すデータであると考えられる。

次に、分裂節内部における主文現象の生起に関するデータを見ていく。以下の例を見てみよう。

- (12) a. * It was **the book_i** that to John_j, Mary gave **t_i t_j** as a gift.
b. ?* It was **in this way_i** that seldom did he use the machine **t_i**.
(13) a. * That the book_i, Mary should read **t_i** is obvious.
b. * That into the room came a cat is obvious.
(14) * It was **into the room_i** that **t_i** came a cat.

(12a)において、焦点要素 (the book) は分裂節内部の話題化要素 (to John) を越えて移動しているが、非文法的である。(12b)では、分裂節内部で否定倒置が起こり、焦点要素 (in this way) は倒置要素 (seldom, did) を越えて移動しているが、非文法的である。(13a, b)は、主語の *that* 節内部での話題化・場所句倒置が不可能であることから、場所句倒置が話題化と同様に主文現象であることを示す (Stowell (1981))。(14)では、分裂節内部で倒置した場所句がさらに焦点化を受けているが、非文法的である。上で示したようなデータに基づき、本多 (2010)は分裂節が主文現象を認めない節であることを示した。⁸

要約すると、主文現象は、分裂文の主節と焦点要素には適用されるが、分裂節内部では適用されないと言える。

⁸ (14)のようなデータに関しては、Arimoto (2005)におけるコピュラ文の考察でも詳細に議論されているが、本稿では、分裂節内部における主文現象の生起を、CP 構造の精緻化と焦点移動の観点から捉えるアプローチを提案する。

3. 先行研究

3. 1. 総記焦点と存在の前提

ここでは、近年の分裂文の先行研究の内、分裂文の焦点の意味解釈を考察した É. Kiss (1998)、分裂文を指定文とみなす分析を提案している Reeve (2011)を見ていく。

まず、É. Kiss (1998)は、焦点を、総記性 (exhaustivity) を表す識別焦点 (identificational focus) と情報焦点 (information focus) に分け、分裂文は識別焦点を持つとしている。⁹

(15) The function of identificational focus: An identificational focus represents a subset of the set of contextually or situationally given elements for which the predicate phrase can potentially hold; it is identified as the exhaustive subset of this set for which the predicate phrase actually holds.

(É. Kiss (1998: 245))

識別焦点は、文脈的・状況的に与えられた叙述対象となりうる集合の内、下位集合を識別する役割を果たす。具体的に、“It was John that came to the party.”という文を例にすると、「パーティに来た可能性がある人の集合から、実際に来た人物として“John”が該当し、その他の人物を除外 (exclusion) する」という識別性が表される。前節では裸普遍数量詞 (everything) が焦点位置に生起できないことを見たが ((6a, b))、それは普遍数量詞が識別性を示さないためである。É. Kiss (1998) によると、識別焦点の構成素は、それ自体が演算子となり、識別焦点の解釈が与えられる機能範疇 F の指定部へ移動し、元位置の変項を束縛する以下の構造を持つ。

⁹ É. Kiss (1998)によると、分裂文の識別焦点は[+exhaustive]と[±contrastive]の素性を持つ。従って、分裂文は必然的に総記性を示すが、対比性を示す場合と示さない場合があるということになる。本稿では、焦点解釈と素性に関する議論の詳細には立ち入らない。

- (16) a. It was **to John_i** that Mary spoke **t_i**.
 b. [CP [IP It [I' was_j [FP **to John_i** [F' t_j [CP t_i [C' that [IP Mary
 [I' [VP spoke t_i]]]]]]]]]]]

(16b)では、機能範疇 F の補部として分裂節が生起し、その内部から CP 指定部を経由して FP 指定部へ焦点要素が移動している。その結果、焦点演算子・変項の形状が生じる。

他方、Reeve (2011)は、分裂文が、定名詞句 (DP) を制限的關係節の先行詞とする指定文と同様に、存在の前提 (existential presupposition) を示すことに着目し、分裂文を指定文とみなす分析を提案している (cf. Percus (1997))。

- (17) a. * The thing that John drank was **everything**.
 b. * The thing that John drank was **nobody**.
 (cf. It was ***everything/*nobody** that John met.)

(17a)は、DP 指定文のコピュラの後に普遍数量詞が生起できないことから、この文が識別 (総記) 焦点を持つことを示す。
 (17b)は、DP 指定文が「John が飲んだものが何かある」という存在の前提を示すのに対し、裸否定数量詞の生起により、「飲んだものは何も無かった」という矛盾が生じていることを示す。これと同様の現象が分裂文でも生じるため、Reeve (2011)は分裂文を指定文とみなし、分裂節が焦点句に右方付加する制限的關係節の構造を持つとしている。¹⁰

- (18) [CP [IP It [I' was_j [VP t_j [PP [PP **to John**] [CP that Mary spoke]]]]]].

¹⁰ Reeve (2011)は、分裂節が關係節と同じ付加構造を持つことを支持するデータとして、分裂節と制限的關係節が強い島として振舞う点を挙げている ((4a, b)を参照)。また、É. Kiss (1998)の分析に関して、左方移動による焦点化を伴う CP 構造を補部とする形状は、*wh* 移動を伴う CP と同様に弱い島を形成するため、なぜ分裂節が強い島としての振る舞いを示すかが説明できないとしている。しかし、É. Kiss (1998)の分裂文の構造が弱い島を形成する形状か、また、*that* を越えた位置に焦点句が生起する形状を埋め込み節の *wh* 文の形状と同一視してよいかという点に関しては議論の余地があると思われる。

(18)において、分裂節は制限的關係節として焦点句に右方付加している。この分析では、É. Kiss (1998)の FP 分析とは異なり、分裂文の焦点と存在の前提の意味は、特定の機能範疇の指定部で与えられるのではなく、指定文としての構造から生じることとなる。

ここでは、分裂文に関する É. Kiss (1998)の識別焦点分析と Reeve (2011)の指定文分析を見た。これらの研究から、分裂文の構造に、識別焦点と存在の前提をどのように反映させるかが重要であると言える。

3. 2. CP の精緻化に基づく分裂文の構造

近年、Rizzi (1997, 2004)や Cinque (1999)等において、従来の CP 領域・IP 領域を複数の機能範疇に分け、形式と意味・談話的機能の対応関係をより精緻化することを主眼の一つとする統語構造地図 (cartography of syntactic structures) の枠組みが発展してきている。この枠組みでは、CP 領域は、Force (文タイプ)、Topic (話題)、Focus (焦点)、Finite (文の定性) といった談話的機能範疇に分かれるという分離 CP 仮説 (split CP hypothesis) が提案されている (Rizzi 1997)。¹¹

- (19) a. ... Force ... Topic ... Focus ... Finite ... (IP) ...
b. He said [_{Force} that [_{Top} beans [_{Foc} never in his life [_{Fin} had [_{IP} he been able to stand]]]]]
c. He said [_{Force} that [_{Top} into the room_i [_{Fin} [_{IP} came John t_i]]]]]

(19b)において、補分標識 (that) が文タイプを平叙 (declarative)、もしくは断定 (assertive) として示す役割を持ち、その間に話題化要素、焦点要素が順に生起する。焦点要素に後続して、Fin

¹¹ Rizzi (1997)の分離 CP 仮説では、(19a)の CP 構造に加えて Fin のすぐ上に Lower Topic が生じるとされている。しかし、英語の場合、このような Lower Topic の位置が存在するかどうかはまだ明らかではないと考えられるため、ここでは簡略化した構造を用いる。また、Rizzi (2004)で提案されている ModP に関しても、本稿では議論しない。

の階層に倒置助動詞が生起し、文が定形であることを示す。¹²
 また、(19c)の例において、場所句倒置が埋め込み節内で起きており、倒置した場所句は話題化の位置へと移動している。¹³

上述の分離 CP 仮説に基づき、Belletti (2008)は、イタリア語の分裂文が、主語を焦点とする分裂文が情報焦点を表すのに対し、目的語や前置詞句を焦点とする場合は対比焦点の解釈を持つことに着目し、コピュラが Force や Topic を欠く FocP を補部として選択するとしている。この提案を英語の分裂文に当てはめると以下のようなになる。¹⁴

- (20) a. It was **to John_i** that Mary spoke **t_i**.
 b. [_{ForceP} [_{IP} It [_{I'} was_j [_{VP} t_j [_{ForceP}... [_{FocP} **to John_i** [_{Fin} that [_{IP} Mary spoke **t_i**]]]]]]]]].

(20b)において、コピュラは(19)の分離 CP 仮説における FocP を補部として選択している。ここでは、FocP は縮小された CP (reduced/truncated CP) として補部選択されており、分裂節は FinP として FocP に後続している。この分析の下では、焦点要素は分裂節の CP 階層 (FocP) に属するため、単節に収まっており、基本的には主節の焦点化と同じ焦点解釈を持つことになる。

ここで見た Belletti (2008)の分析に関して、左方移動による焦点化とは異なり、裸数量詞が分裂文の焦点にならない点や焦点要素が左方移動による焦点化を受けることを考慮すると、(20b)の FocP に関して何らかの仮定が必要になると思われる。次節ではこの点を踏まえながら、分析の提案を行う。

¹² ここで提示しているデータと分離 CP 仮説の対応に関して、補文標識が生起する位置や倒置した助動詞が移動する位置については様々な可能性がある。ここでは、その問題の詳細には立ち入らない。

¹³ 既に 2.3 で見たが、場所句倒置文の場所句は話題化（さらには、焦点化）を受けていると考えられている (Stowell (1981))。

¹⁴ Haegeman and Menuinger (2011)では、truncated CP として選択された FocP は文中の焦点位置を示すものとして、主節への左方移動による焦点と区別している。

4. 提案

4. 1. 分裂文の構造の概観

ここでは、分裂文における定性効果に基づき大まかな構造を探り、その後、4. 2 で識別焦点と存在の前提をどのように統語構造に反映したらよいかを考察する。

まずは、制限的關係節と分裂節における定性効果の例 ((8a, b)) を以下に再掲する。

- (21) a. The men_i that there were t_i in the castle were all knights.
b. * It was **the men_i** that there were t_i in the castle.

(21a, b)の対比は、制限的關係節が定性効果を示さないのに対し、分裂文は定性効果により非文法性が生じること示す。關係節の研究では、(21a)の文法性は、DP が CP を補部として選択する外在的 D (external D) 構造から生じると考えられている (Kayne (1994); Bianchi (1999); Aoun and Li (2003)).¹⁵

- (22) a. The men that there were in the castle ...
b. [DP the [CP [DP men_j [D' OP [NP t_j]]]_i [C' that [IP there were t_i in the castle]]]] ...

(22b)の制限的關係節の構造では、主要部 D が CP を補部とし、關係節演算子を含む DP が CP の指定部へと移動している。CP 指定部の DP 内部では、主要部 D の位置に空演算子が生起し、DP 指定部に名詞句が移動している。この構造では、移動の元位置には NP (men) があるため、定性効果は生じない。この外在的 D 構造を踏まえると、分裂文における定性効果は、以下のように分裂節と焦点が外在的 D 構造を持たず、DP を直接補部から移動するために生じると考えることができる。

¹⁵ ここでは、議論の都合上、wh 演算子を伴う制限的關係節の構造と非制限的關係節の構造は考察しない。前者については Aoun and Li (2003)を、後者については Bianchi (1999)を参照されたい。

(23) a. * It was **the men_i** that there were **t_i** in the castle.

b. ... [_{Focus} **the men_i** [_{CP} that there were **t_i** in the castle]]

ここまでの考察をまとめると、制限的關係節と先行詞、分裂節と焦点の構造関係の概観は、以下のように示される。

(24) a. [_{DP} The [_{CP} men_i that we met t_i in the castle]] ...

b. It is [_{Focus} **the men_i** [_{CP} that we met **t_i** in the castle]]

(24a)は制限的關係節の構造であり、外在的 D が CP を補部として選択している。(24b)は分裂節の構造であり、元位置から DP (the men) が直接焦点移動している。

次に、(24b)の構造に、識別焦点と存在の前提がどのように反映されるかを考察する。前節で見たように、É. Kiss (1998) は、FP 指定部で識別焦点解釈が付与されるとしていたが、存在の前提の詳細については議論していない。Reeve (2011)では、分裂文の識別焦点と存在の前提が、指定文の特徴と共通する点を論じているが、具体的な統語構造との対応に関しては詳細に議論されていない。本稿では、基本的に É. Kiss (1998) の FP 分析を採用するが、主要部 F の指定部で識別焦点解釈が与えられ、その補部で存在の前提が示されると提案する。

(25) [_{FP} *Exhaustive Focus* [_{F'} [_{CP} *Existential Presupposition*]]]

(26) [_{CP} [_{IP} It [_{I'} was_j [_{FP} **John_i** [_{F'} t_j [_{CP} that [_{IP} Mary met **t_i**]]]]]]]]]

(25)の提案では、コピュラが生起する主要部 F の指定部・補部で識別焦点・存在の前提が意味として与えられる。¹⁶ また、コピュラは分裂節を CP 補部として選択している。この構造

¹⁶ ここでの提案に関連し、分裂文ではなぜ“it”が必ず生起するかという問題については、今後の課題としたい。また、Hasegawa (2011)において、分裂節内の時制と主節のコピュラの時制が一致する現象が指摘されており、全体を一つの節 (simplex clause) とする分析が提案されている。本研究での提案では、主節と分裂節は独立して生起する CP 構造を持つため、この時制の一致現象は基本的には説明することができない問題である。

では、識別焦点は、分裂節の一部としてではなく、文中の機能範疇 F の指定部で与えられるため、基本的には主節への左方移動による焦点化とは区別される。

上述の分裂文の構造に関連し、4. 2 では、分離 CP 仮説に基づき、焦点移動の性質を整理しながら、分析の提案を行う。

4. 2. 焦点移動の性質

ここでは、分離 CP 仮説に関連する概念として、基準的凍結 (criterial freezing) と局所性 (locality) を見た後、分裂文の焦点移動との関連性を述べる。

まず、主節の A-bar 位置へ移動した要素はその場で凍結し、さらに移動することができなくなるという基準的凍結を採用する (Rizzi and Shlonsky (以下、R & S) (2007))。

(27) Criterial Freezing: A phrase meeting a criterion is frozen in place. (R & S (2007: 118))

(28) a. Mi domandavo quale RAGAZZA avessero scelto, non quale ragazzo

‘I wondered which GIRL they had chosen, not which boy’

(R & S (2007: 117))

b. * Quale RAGAZZA mi domandavo __ avessero scelto, non quale ragazzo

‘Which GIRL I wondered they had chosen, not which boy’

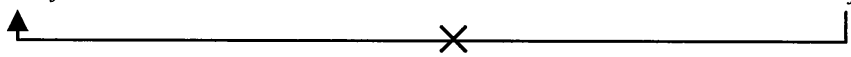
(ibid.)

(28a)では、間接疑問文内で、*wh* 要素の *wh* 素性・(対比) 焦点素性が同時に照合・削除されている。ここでは、基準的凍結の違反は生じない。他方、(28b)では、*wh* 要素を埋め込み節から主節に移動することにより、*wh* 素性・焦点素性を一つずつ照合・削除しようとしているが、基準的凍結の違反を引き起こしている。本稿では、基準的凍結は、主節・埋め込み

節の CP に適用されるものとする。

次に、*wh* 要素や焦点要素等の数量的表現を越えて別の数量的表現が移動する際には局所性(Relativized Minimality(以下、RM))違反が生じると考える (cf. Starke (2001); Rizzi (2004))。¹⁷

(29) * ... α $\langle Q(wh) \rangle_i$... γ $\langle Q(focus) \rangle$... t_i ...

(30) * How_j do you think that **this stuff_i** I should cook t_i t_j .


(30)では、焦点 (**this stuff**) を越えて *wh* 要素 (**how**) が移動しているが、非文法的である。これは、(29)で示した数量的表現の移動に課される局所性条件を違反しているためである。また、ここで述べている局所性違反とは異なるが、以下の例が示すように、英語においては項の話題化要素も項の *wh* 移動を阻止する (cf. Rochemont (1989))。

(31) * What_i do you think that to John_j, she gave t_i t_j ?

(31)のように、なぜ話題化要素が *wh* 移動を阻止するかという問題に関して、上述の局所性の観点のみでは説明が困難だが、移動の阻止効果を示す事例であると考えることができる。

上述の基準的凍結と局所性 (RM) 違反と分裂文における焦点移動の関連性を整理する。まず、基準的凍結に関して、分裂文は主節の焦点とは異なる焦点を文中 (FP) に持つとした。従って、分裂文の焦点要素には基準的凍結は適用されないが、焦点移動が適用される分裂節内部の要素には基準的凍結が適用されることとなる。次に、局所性違反に関して、分裂文には焦点移動が適用されるため、分裂節内部に焦点要素が生起する場合、局所性違反が生じることとなる。

4.3 では、以上の分析に基づく予測を述べる。

¹⁷ (30)のような例文と弱い島に関する議論については、Starke (2001)を参照されたい。

4. 3. 予測

4. 1、4. 2 では、以下の分裂文の構造を提案した。

(32) [CP It was_j [FP **John**_i [F' t_j [CP that [IP Mary [I' [VP met t_i]]]]]]]

この分析に基づく予測は以下の通りである。

- (33) a. 再構成：分裂文において、焦点要素は直接 FP 指定部へ移動するため、再構成効果を示す。
- b. 定性効果と **that** の生起：制限的關係節とは異なり、分裂文は外在的 D 構造を持たないため、定冠詞を伴う DP が焦点位置に生起する場合、定性効果の違反が生じる。また、コピュラは分裂節を補部として選択するため、**that** の省略も認められる。
- c. 主文現象：文中の識別焦点は基準的凍結を受けないため、主文現象が適用される。他方、分裂節での主文現象の生起は、話題の島、焦点タイプの局所性違反、基準的凍結による制約を受ける。

次節では上記の予測の検証を行う。

5. 帰結

5. 1. 再構成

まず、(33a)の再構成に関する予測は、以下の例（(7a-d)の再掲）によって確かめられる。

- (34) a. It is **proud of himself**_i/***him**_i/***John** that he_i seems to be.
(Reeve (2011: 161))
- b. It is **his**_i **finals** that no students_i enjoys. (ibid.)
- c. It was **a chicken** that every dog ate. [∀ > ∃] (ibid.)
- d. It's **careful track** that she's keeping of her expenses.
(ibid.: 164)

(34a-d)の再構成効果は、焦点移動の元位置での束縛関係・作用域関係が保持されることから生じる。

5. 2. 定性効果と **that** の生起

(33b)の定性効果に関する予測は、以下のデータ ((8a, b)の再掲) で確かめられる。

(35) a. The men_i that there were t_i in the castle were all knights.

b. * It was the men_i that there were t_i in the castle.

制限的關係節とは異なり、分裂文は外在的 D 構造を持たないため、定性効果が生じる

また、コピュラは分裂節を補部とするため、主語の焦点化の際、ゼロ形補文標識を用いることができると予測されるが、これは、以下の対比 ((10a, b)の再掲) により確かめられる。

(36) a. * I know the man_i (that/who/* ϕ) t_i spoke to me.

b. It was John_i (that/who/ ϕ) t_i spoke to me.

5. 3. 接続性

最後に、(33c)に関して、分裂文の主節要素や基準的凍結が適用されない識別焦点には主文現象が適用可能であると予測されるが、これは以下の例 ((11a-e)の再掲) で確かめられる。

(37) a. John_i, it was that Mary met t_i yesterday.

b. **John_i** it was that Mary saw t_i. (Reeve (2011: 169))

c. Who_i it was that Mary met t_i yesterday?

d. % On no account should it be **the students_i** who t_i are correcting the papers!

(Haegeman and Menunger (2011: 15))

e. How happy_i it was that she was t_i in those days!

(Declerck (1988: 198))

他方、分裂節内部では、話題の島、局所性（RM）違反、基準的凍結により、主文現象の生起に制約が課されることが予測される。この予測は以下のデータ（(12a-c)の再掲）により確かめられる。

- (38) a. * It was **the book_i** that to John_j, Mary gave **t_i t_j** as a gift.
b. ?* It was **in this way_i** that seldom did he use the machine **t_i**.
c. * It was **into the room_i** that **t_i** came a cat.

(38a)では、話題化要素が焦点移動を阻止している。(38b)では、焦点要素が、別の焦点要素である否定倒置要素を越えて移動しているため、局所性（RM）違反が生じる。(38c)では、基準的凍結により、話題化した場所句にさらに焦点移動を適用することはできないため、非文法性が生じる。尚、(38c)に関連し、動詞後の名詞句を焦点化する場合は、以下の例の通り、話題化した場所句による阻止効果が生じ、非文法的となる。

- (39) * It was **a cat_i** that into the room came **t_i**.

6. 結論

本稿では、英語の分裂文における分裂節の構造を、再構成、定性効果、that の生起、主文現象の生起から再考し、分裂節が制限的關係節とは異なる構造を持つことを述べた。具体的には、定性効果に基づき、制限的關係節が外在的 D 構造（[_{DP} [_{CP}]]）を持つのに対し、分裂節は主要部 F に生起するコピュラに選択される補部であることを示した。そして、分裂節は補部として選択されるため、主語の焦点化の際に（インフォーマルな文体ではあるが）that の省略が認められるとの分析を提示した。識別焦点に関しては、焦点要素が元位置から FP 指定部へ直接移動することによってその解釈が与えられ、再構成効果はこの焦点要素の直接移動から生じると述べた。

また、識別焦点は、主節ではなく文中の焦点であるため、基準的凍結とは関わりがなく、話題化のような主文現象が適用される一方、分裂節内部では話題化要素による焦点移動の阻止効果、焦点要素の生起による局所性違反、基準的凍結により焦点移動が適用されない事例が生じることを示した。

本稿における分裂節の考察では、文中の（識別）焦点が主節の焦点とは異なる特性を持ち、それぞれ区別されることを示した。本稿では、主節への左方移動を伴う主文現象の適用と分裂節内部での主文現象の生起という観点から、文中の焦点移動の性質を探るアプローチを提示した。このアプローチにおいて、Rizzi (1997, 2004)の分離 CP 仮説、基準的凍結、局所性 (RM) が有用であることを示した。本研究は、分裂文という文中の焦点要素の意味解釈と統語構造の関係を精緻化し、CP の談話的機能と統語構造の共通点・相違点を捉える試みとして位置付けられるが、主文現象との比較・関連性に基づく考察は、このような主節と文中の統語的位置と談話的役割を捉える上でも、重要な手掛かりを与えるものと考えられる。

参考文献

- Aoun, Joseph and Yen-hui A. Li (2003) *Essays on the Representational and Derivational Nature of Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Arimoto, Masatake (2005) "Copular Clauses in English," *Nanzan Linguistics* 3, 31-59.
- Belletti, Adriana (2008) "The CP of *clefts*," *Studies in Linguistics, CISCL Working Papers* 2, 7-17.
- Bianchi, Valentina (1999) *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*. Mouton de Gruyter, Berlin

- Browning, Marguerite A. (1991) *Null Operator Constructions*. Garland, Oxford.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," In *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71-132. Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, Oxford.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo Clefts*. Leuven University Press, Leuven.
- Delahunty, Gerald P. (1982) *Topics in the Syntax and Semantics of English Cleft Sentences*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington, IN.
- Dikken, Marcel den (2009) "Predication and Specification in the Syntax of Cleft Sentences," ms., CUNY Graduate Center.
- É. Kiss Katalin (1998) "Identificational Focus versus Informational Focus," *Language* 74, 245-273.
- Haegeman, Liliane and Andre Meinunger (2011) "The Syntax of It-Clefts and The Left Periphery of the Clause," ms., Ghent University and ZAS Berlin.
- Hasegawa, Nobuko (2011) "On the Cleft Construction: Is It Simplex or Complex?," *Scientific Approaches to Language* 10, 13-32. Center for Language Science, Kanda University of International Studies.
- Heggie, Lorie (1988) *The Syntax of Copular Clauses*, Doctoral dissertation, University of Southern California.
- Higgins, Francis R. (1973) *The Pseudo-Cleft Construction*, Doctoral dissertation, MIT.

- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. The MIT Press, Cambridge, MA.
- Milsark, Gary L. (1979) *Existential Sentences in English*. Garland, New York.
- Percus, Orin (1997) "Prying Open the Cleft," *NELS* 27, 337-351.
- Prince, Ellen (1978) "A Comparison of Wh-Clefts and It-Clefts in Discourse," *Language* 54, 883-906.
- Radford, Andrew (1981) *Transformational Syntax: A Student's Guide to Chomsky's Extended Standard Theory*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Reeve, Matthew (2011) "The Syntactic Structure of English Clefts," *Lingua* 121, 142-171.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of Left Periphery," In *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 289-330. Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (2004) "Locality and Left Periphery," in *Structures and beyond*, ed. by Adriana Belletti, 223-251. Oxford University Press, New York.
- Rizzi, Luigi and Uri Shlonsky (2007) "Strategies for Subject Extraction," In *Interfaces+ Recursion = Language? ; Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 115-160. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Rochmont, Michael S. (1986) *Focus in Generative Grammar*. John Benjamins, Amsterdam.
- Rochmont, Michael S. (1989) "Topic Islands and the Subjacency Parameter," *Canadian Journal of Linguistics* 34, 145-170.

- Ross, John R. (1986) *Infinite Syntax!* Ablex Publishing Corporation, New Jersey.
- Starke, Michal (2001). Move Dissolves Into Merge: A Theory of Locality, Doctoral dissertation, University of Geneva.
- Stowell, Timothy (1981) Origins of Phrase Structure, Doctoral dissertation, MIT.
- Szabolcsi, Anna (2006) “Strong and Weak Islands,” In *The Blackwell Companion to Syntax*, Vol 4, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 579-532. Blackwell, Oxford.
- 本多 正敏 (2010) 『英語における分裂文の焦点移動分析—統語構造地図の観点から—』 *JELS* 27, 41-50.

261-0014

千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

児童英語教育研究センター

honda-m@kanda.kuis.ac.jp